パンプキン 12 月号原稿

# 『赤毛のアン』生誕 100 周年

本年は名作『赤毛のアン』の出版からちょうど 100 年。国内でも愛読者は多く、ＮＨＫ番組での企画を初め、さまざまな催しが行われてきた。この夏、筆者が訪れた作品の舞台・カナダのプリンスエドワード島では、数多くの日本からの観光客にも出会った。

なぜこれほど日本で読まれるようになったのか。それは、原作のすばらしさ、誰をも魅了するアンのキャラクター、またマシュー、マリラの老兄妹がアンを育てることによって人間的に豊かになっていくストーリー、そしてプリンスエドワード島の美しい自然の描写などだろう。

次は、翻訳のすばらしさである。作品が日本で最初に翻訳されたのは、戦後まもなく、山梨県生まれの村岡花子によってだった。戦時中、カナダ人の宣教師からアンの原書を渡された村岡花子は、灯火管制のもと空襲警報が出ると家じゅうの戸を閉め、外に光が漏れないようにした電燈の下で訳し続けた。英語が「敵性語」とされていたなかである。「日本の子どもたちに夢を！」との彼女の何ものにも屈しない勇気が扉を開いた。本が出版されたのは、終戦間もない昭和 27 年（1952 年）だった。

名訳もだが、出色は「赤毛のアン」のタイトルだった。もしこれが原作「Anne of Green Gables」の直訳「グリーンゲイブルズのアン」あるいは「緑の切妻屋根のアン」だったら、これほどまでに読者を惹きつけなかったであろう。彼女は当初「窓辺の少女」「窓に依る少女」「夢見る少女」といろいろ考えたようだ。結果的に、当時大学生だった娘の「『赤毛のアン』がピッタリだわ」との強い薦めに従って決まったのだという。「赤毛」はブロンドにも通じ、黒髪の自分たちとは違う異国の少女へのあこがれ的なものも含まれていたのかもしれない。「あかげのあん」との母音の繰り返しも心地よく聞こえる。

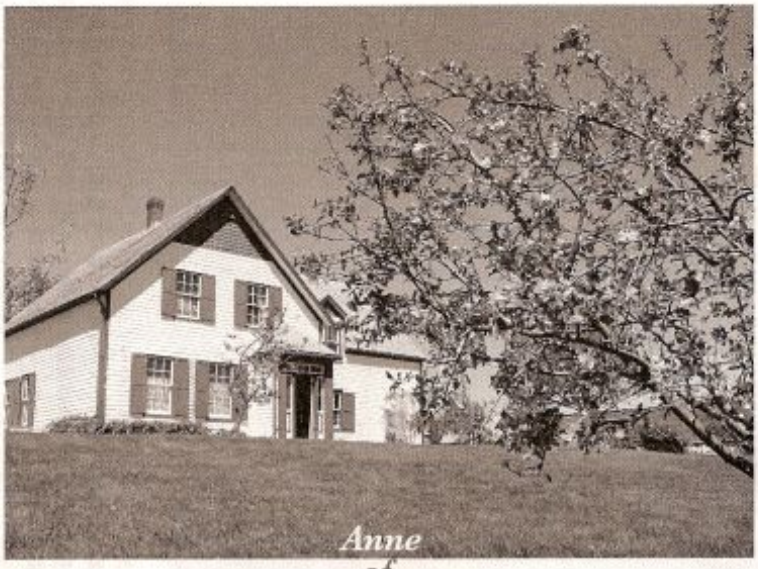
アンの取材を思いたった 2 年前、村岡花子の生地、山梨の文学館で彼女の足跡を紹介する展示会場を訪ねた。彼女が実質的に翻訳の仕事に取り組んだ場は東京・大田区である。現在、「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」があり、お孫さん二人が管理運営にあたっている。

美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられる。最終章――競争の激しい大学への奨学金試験を勝ち取り、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーンゲイブルズを手放さなくてはいけないというマリラの苦悩・・・。それを知ったアンは、これまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学を諦め村に居残ることを決める。

順調に見える人生も、途上で何が起こるかわからない。人生の曲がり角で、岐路で思いがけない障害に直面することもある。そのときにアンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いて欲しい――これこそ著者モンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージではないか。

一方、アンがギルバートの頭に打ち下ろした石盤など、日本の終戦直後の学校を思い出させるようなクラスの描写、また屋根の棟を歩き転げ落ちて足首を骨折するなど、アンの負けん気と無鉄砲さは、校舎の二階から飛び降りて怪我をした夏目漱石の「坊ちゃん」をほうふつとさせてくれるようで、一層の親しみも深めてくれる。

作品は若い女性ばかりでなく、中年女性も男性もシニアもすべての大人が読むべき本、また読み直すに値する文学だと思う。少年少女時代には夢があった。青春時代にはその夢に向かって挑戦した。だが年をとるにつれて夢を失い、身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。そんな人にアンは心のみずみずしさと、ときめきを贈ってくれる。



物語の舞台
グリーンゲイブルズの家

*Anne of Green Gables*

# 日本の子どもたちに夢を！

現地でアンを演じる少女

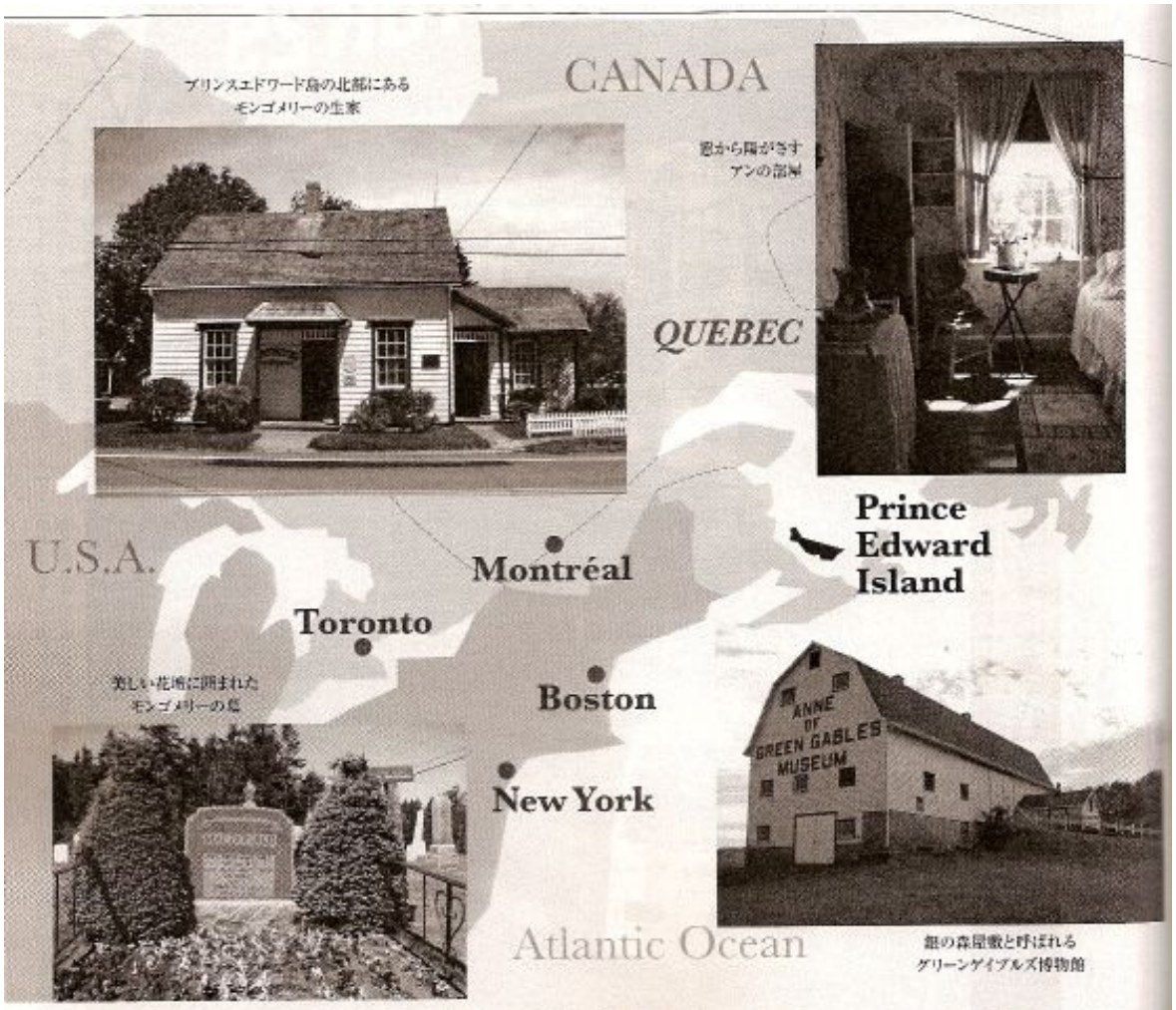
本年は名作「赤毛のアン」の出版からちょうど100年。国内でも愛読者は多く、さまざまな催しが行われてきた。

## 翻訳のすばらしさ

なぜこれほど日本で読まれるようになったのか。それは、原作のすばらしさ、だれをも魅了するアンのキャラクター、またマシューとマリラの老兄妹がアンを育てることによって人間的に豊かになっていくストーリー、そしてプリンスエドワード島の美しい自然の描写などだろう。

次は、翻訳のすばらしさである。作品が日本で最初に訳されたのは、戦後まもなく、山梨県生まれの村岡花子さんによってだった。戦時中、カナダ人の宣教師からアンの原書を渡された村岡さんは、灯火管制のもと空襲警報が鳴ると家中の戸を閉め、外に光が漏れないようにした電灯の下で訳しつづけた。英語が「敵性語」とされていた時代である。「日本の子どもたちに夢を！」という彼女の何ものにも屈しない勇気が扉を開いた。本が出版されたのは、終戦後の1952（昭和27）年だった。

名訳もだが、出色は「赤毛のアン」のタイトルだった。もしこれが原作「Anne of Green Gables」の直訳「グリーンゲイブルズのアン」あるいは「緑の切妻屋根のアン」だったら、これほどまでに読者を惹きつけなかったであろう。彼女は当初「窓辺の少女」「窓辺に依る少女」「夢見る少女」と、いろいろ考えたようだ。結果的に、当時大学生だった娘の「『赤毛のアン』がピッタリだわ」という強い勧めによって決まったのだという。「赤毛」はブロンドにも通じ、黒髪の自分たちとは違う異国の少女への憧れ的なものも含まれていたのかもしれない。「あかげのあん」という母音の




プリンスエドワード島の北部にある
モンゴメリーの生家

窓から陽がさす
アンの部屋

美しい花壇に囲まれた
モンゴメリーの墓

緑の森屋敷と呼ばれる
グリーンゲイブルズ博物館

くり返しも心迷わく聞こえる。

## だれをも魅了するアンの勇気

美しいものに憧れる乙女心。数えきれない失敗。それでも〝想像力〟を駆使し、けっして希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられる。最終章――競争の激しい大学への奨学金試験を勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーンゲイブルズの家を手放さなくてはいけないというマリラの苦悩……。それを知ったアンは、これまで育ててくれた2人への愛と愛情に、進学を諦め、村に居残ることを決める。

順調にみえる人生も、途上で何が起こるかわからない。人生の曲がり角や岐路で、思いがけない障害に直面することもある。そのときにアンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いてほしい――これこそ著者モンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージではないか。

一方、アンがギルバートの頭に打ちおろした石盤など、日本の終戦直後の学校を思い出させるようなクラスの描写、また屋根の棟を歩き、転げ落ちて足首を骨折するなど、アンの負けん気と無鉄砲さは、校舎の2階から飛び降りて怪我をした夏目漱石の「坊っちゃん」をほうふつとさせてくれるようで、いっそうの親しみも深めてくれる。

作品は若い女性ばかりではなく、男性もシニアも、すべての大人が読むべき本、また読み直すに値する文学だと思う。少年少女時代には夢があった。青春時代にはその夢に向かって挑戦した。だが年をとるにつれて夢を失い、身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。そんな人にアンは心のみずみずしさと、ときめきを贈ってくれる。

写真・文＝治水 武